

熊倉遺跡発掘調査の課題と展望

市村勝美・山本清司

1. 社会教育の中での発掘調査

熊倉遺跡は、発掘調査の結果嘗々と集落が営まれたものではなく、平安時代になって突如出現したムラであることが判った。また、このムラはその後間もなく廃絶されていることも判った。この事実をどのように解釈するかの問題は、同時におこなわれた多くの調査によって解け始めている。私たち、六合村で社会教育を推進する者にとってこの調査による最大の収穫は、“熊倉ムラの人たちは六合村のパイオニアであった”とする見解が示されたことである。山の奥で様々な試行錯誤を繰り返してきた山間住民の生活の原点が熊倉にあったわけである。

昭和56年になって、熊倉遺跡が危機に瀕した。とりあえず、遺跡の保護を目的に発掘調査に入った。財源の少ない過疎の村にとって、正直のところ大英断であった。その後の県教委との協議の中で、文化財保護行政における発掘調査は、単に遺跡を記録としてとどめておくのみではなく、資料化された遺跡の内容を新しい文化・生活・村づくりなどのための基本的な資料として活用することが本来の目的であると確信するに至った。

六合村も、御多分にもれず過疎の村である。若者の志向は町に向き、老人たちは活性を失いつつある。山村に生れ、育ち、汗を流した帰結がこれでは何んともさびしいかぎりである。村民生活の活性化を求める声は、ここ十数年来とだえたことがない。新しい村づくりが必要になっているゆえんである。

2. 山に根ざした村づくり

自分たちの住んでいる地域を歴史的に理解することは、過去の風土の変遷を理解するということになる。それは、とりもなおさず新しい風土性を求めるための基礎をかためるということにもなる。

風土性とは、単にその地域特有の機構、地味、植生などを示す言葉ではなく、常に人間が介在して作られるものであると考えられる。人間によって開拓され、地形が変わる。人間が社会を形成し、集落をつくり上げる。そこで展開される様々な社会活動が地域を変貌させる。その結果として得られる景観が風土性である。すなわち、風土とは、その時々の人の心によって変貌をとげることになる。

今、平野部に展開する新しい社会の波は、山深き六合村にも押し寄せている。新しい社会の波は、古い習慣をことごとく否定し、近代的な社会をつくり上げようとしている。六合村もずいぶんと変貌をとげた。もちろん人の心もある。これら近代化の波を全面的に否定することはできない。むしろ、積極的にとり入れることによって新しい六合村を志向しなければならない。しかし、嘗々と培われてきた山間部の生活様式を捨て去ってまで、この新しい近代化をおしそすめてよいものかどうかは大きな問題となろう。平野部で培われた生活様式、そしてそれに基づいた社会の体系をそのまま、この地域に入れてよいものであろうか。地域に根ざした発展とはいいったい何んであるのかを模索しなくてはならないのではないだろうか。

私たちは、熊倉遺跡の発掘によって得られた資料をもとにして、山に根ざした新

しい村づくりの構想原案を作成したので、ここに提示したい。

3. 「心のふるさと」六合村づくり構想

私たちは、「黒い土をもった広大な平坦地を目指した人たちが、その地味の悪さや劣悪な気象条件に気づき、その後谷底や傾斜地に移動した」という調査所見を支持したい。しかし、だからといって六合村のバイオニアたちが、ゆとりのある生活を展開していたとは考えられない。その場所でも、山間地という苛酷な条件下での生活であったろう。彼らはそのような中でも力強く生活を続けてきたのであった。今、私たちは、この歴史的事実をしっかりと認識することが必要である。この地に根ざした先人たちの生き方を学びながら、この地で新しい社会をつくり上げてみたい。提示する構想図は、この考え方を根底にすえている。

山村生活資料館 まず、考えなければならないことは、六合村の地域を理解する方法である。ここでは「山村生活資料館」を中心にした活動を考えた。一口に六合村と言っても、その中にはいくつもの環境があり、いくつもの生活様式がある。山村生活資料館は、六合村を知るために基本資料を系統的に収集し、資料化を図る。あくまでも村民の学習の場であり、村民に理解できる資料化が最大の懸案となる。また、討論、会議、集会などの施設を併設し、六合村の歴史を根底にすえたコミュニケーション広場としたい。新しい村づくりの構想は、ここを拠点としてすべてが始まる。

ふるさとを知る親と子の会 歴史は生きている。生き続けなければならない。山村生活資料館の資料収集は、村民の手でおこなわなければならない。生きた歴史は語りつがれねばならない。歴史を持続させる糸は、おじいさん、おばあさんと子供たちの間でしっかりと組織してもらいたい。使われなくなった古い道具、語り継がれた生活の知恵、そして地域で根づいた伝説などは、老人の積極的な村づくりへの参加によって、新しい社会づくりの中で生きとよみがえるはずである。また、すたれてゆく年中行事をみなおして、幼ない頃の思い出をはぐくんでもらいたい。お年寄りの責務は大きいものであるし、これからはいそがしい毎日にもなろう。

あすの六合村構想委員会 青年たちは、あすの六合村の担い手として、社会を考え、発展させる責務がある。子供の頃から体得した生活信条を、みんなで発表し分析することによって、現実化しなければならない。新しいものを獲得するためには、広範なしかも慎重な討論が必要である。すべての問題について、正面からあたってほしい。もちろん、自らの学習が大事であるが、村を離れた人からの意見も貴重であるし、他地域の実現も構想を培う重要な要素となろう。最も大切なことは、地域に根ざした新しい村づくりである。山村生活資料館を中心とした積極的な政治参加、行政への助言が必要である。地についた企画力とともに若者の

雪とのたたかい 春になっても融けない雪に土をかけて融雪をうながす。遅い春に対するいらだちかも知れない。



力強さが要求される。

学習とスポーツ　山村生活資料館を中心とした、広範な学習活動が必要である。コミュニケーション広場は、そのまま学習広場になる。ふるさとを知る親と子の会の活動によって資料館内には多種多様の「ライブラリー」が完成する。生活の支えとなった六合村木工は公開民家での「体験教室」として残そうではないか。歴史、自然、文学その他多くの「野外観察コース」もつくろう。学問の最先端を感じるために「入山シンポジウム」の開催も良い。

レクリエーション・スポーツも欠かせない村づくりのひとつといえる。郡民体育祭への積極的参加、野反湖マラソンのフェスティバル化は心おどる新しいお祭りになるかもしれない。白根山麓の地形を生かした六合村スキーマラソンも、この地域ならではの企画になると確信したい。新しいお祭りは“里がえり”のきっかけともなる。外来者の受け入れ　民俗の里六合村は、外来者も多い。しかし、それの人たちの多くは、他の観光地への通過地点としての利用がほとんどである。“六合村に行つてみたい”という気持を村づくりに利用しようではないか。村人たちの積極的な学習・村づくりの活動は、外に向けてのアピールでもある。心ない観光者によって村内が乱れるのは困る。ともに学習できる環境づくりが必要になる。他地域の人たちにも学習のための学習教室や研究合宿のチャンスを与えてみたい。幸い、六合村には多くの温泉や民宿がある。下地づくりはすでに完備しているのではないだろうか。

4. おわりに

以上の構想は、熊倉遺跡の発掘調査を通して、六合村を理解し、新しい六合村を考えるためのひとつの案である。熊倉遺跡の発掘調査の結果は、今後多くの研究者間で議論され、さらに分析されるであろう。ここに掲げた私たちの構想案もまた、多くの村民によって分析され、実現化に新しい歩みを続け始めることであろう。

実りの秋　収穫は一年の努力の実りであるとともに、冬にたち向うドラマの始まりでもある。



「心のふるさと」六合村づくり構想

